令和６年度　清明高校

ティーチャーズバイブル

～ 理 論 編 ～

校長　川畑　由美子

はじめに

かつて紫野グランドと呼ばれていた場所に清明高校が生まれたのは、2015年。以来、わたしたちは、さまざまな志望動機や学習経験のある生徒たちが自分のペースで学べるよう、フレキシブルな教育システムやＩＣＴを活用しつつ、教育内容の質の向上に努めてきました。

では、開校10年目を迎えた今の清明高校をどう創る？

令和６年度のスタートにあたり、ティーチャーズバイブル（理論編）を改訂しました。

教育システムの５つの特長

学ぶ時間帯 × FLEX
POINT 1

自分に合った時間帯で学べる

自分のライフスタイルや将来の目標に応じて、午前コースと午後コースのどちらかを選択し、自分に合った時間帯で学ぶことができます。また、いずれのコースを選択しても、科目選択の工夫などにより、登校してから下校するまでの学ぶ時間帯を自分で設定することが可能です。

時間割 × FLEX
POINT 2

多様な科目から自由に選べる

新設高校では、選択できる科目が非常に多く用意されています。そしてそれらの科目を学年を越えて学ぶこともできます。単位制のメリットを活かして自分に合った科目を自由に選択し、自分だけの時間割を作ることができる点が他の高校と大きく違うところです。

学び方 × FLEX
POINT 3

学び方はいろいろ

校内での授業だけではなく、他の学校や大学での授業、ボランティア活動、高卒認定試験の単位認定など、様々なスタイルの学習が可能です。 また、1年間を通して学ぶ科目の他、半年で単位を修得できる科目や短期集中講座なども選択することができます。

高校生活 × FLEX
POINT 4

74単位 + α = ∞（無限大）の高校生活

新設高校では、卒業に必要な単位数を最も少ない 74 単位に設定していますので、1週間あたりの授業時数も自分のペースに合わせて選べます。興味のある科目をもっと選択したり、校外の活動に力を入れたり、高校時代の生活全体をトータルにデザインすることが可能です。

修業年限 × FLEX
POINT 5

自分のペースで学んで3年で卒業も

新設高校では、全日制課程と同じように 3 年間での卒業を可能にしています。午前コースの人が週に数回、午後コースの科目を選択したり（午後コースの場合はその逆）、高卒認定試験での合格科目等を合算することで、卒業に必要な単位数を 3 年間で修得することができます。

CONCEPT
基本コンセプト

学び アンダンテ

「アンダンテ」とは、曲のテンポを表す音楽用語。「歩くような速さで」という意味のイタリア語です。流れる景色、軽やかなリズム、光る汗…。風を切って走るのは気持ちいい。でも、人のペースを気にしたり、少し無理をしてしまったりで、自分のペースが乱れてしまうことだってあります。

そういうときは、ゆっくりでもいいから、少しずつでいいから、歩きはじめればいい。「少」し「止」まってまた「歩」く。千里の道も一歩から。新たな一歩を踏み出すとして、自分のペースで学ぶとして、そうしたみなさんにとって無理なく過ごせる学校でありたい。だから、「アンダンテ（=歩くような速さで）」をこの学校のコンセプトにしようと考えました。

VISION
理想の 学校像

MISSION 私たちの使命

耳を澄まし、学びを支え、自信と可能性を届けること。それが私たちの使命です。

VISION 10 年後の姿

新たな学びを創造し、すべての人が安心して通える、すてきな学校となっている。

VALUE 大切にしたいこと

軒遊び（つかず離れず）
自然体（無理なく）
大丈夫（やってみなはれ）

STUDENT
求める生徒像

新たな一歩を踏み出すために、自分のペースで学びたい生徒

例えば……

- サポートシステムを活かして自分の学びのスタイルを見つけたい生徒
- 単位制というシステムに魅力を感じ、積極的に活用したい生徒
- 学校から遠ざかっていたが、もう一度学校生活をやり直したい生徒
- 中学までの勉強をやり直し、基礎的な学習からスタートしたい生徒
- 素直に笑いたいときに笑え、素顔で過ごせる雰囲気が好きな生徒

京都市地区新設高等学校開設準備委員会パンフレット　（2014.3.1）

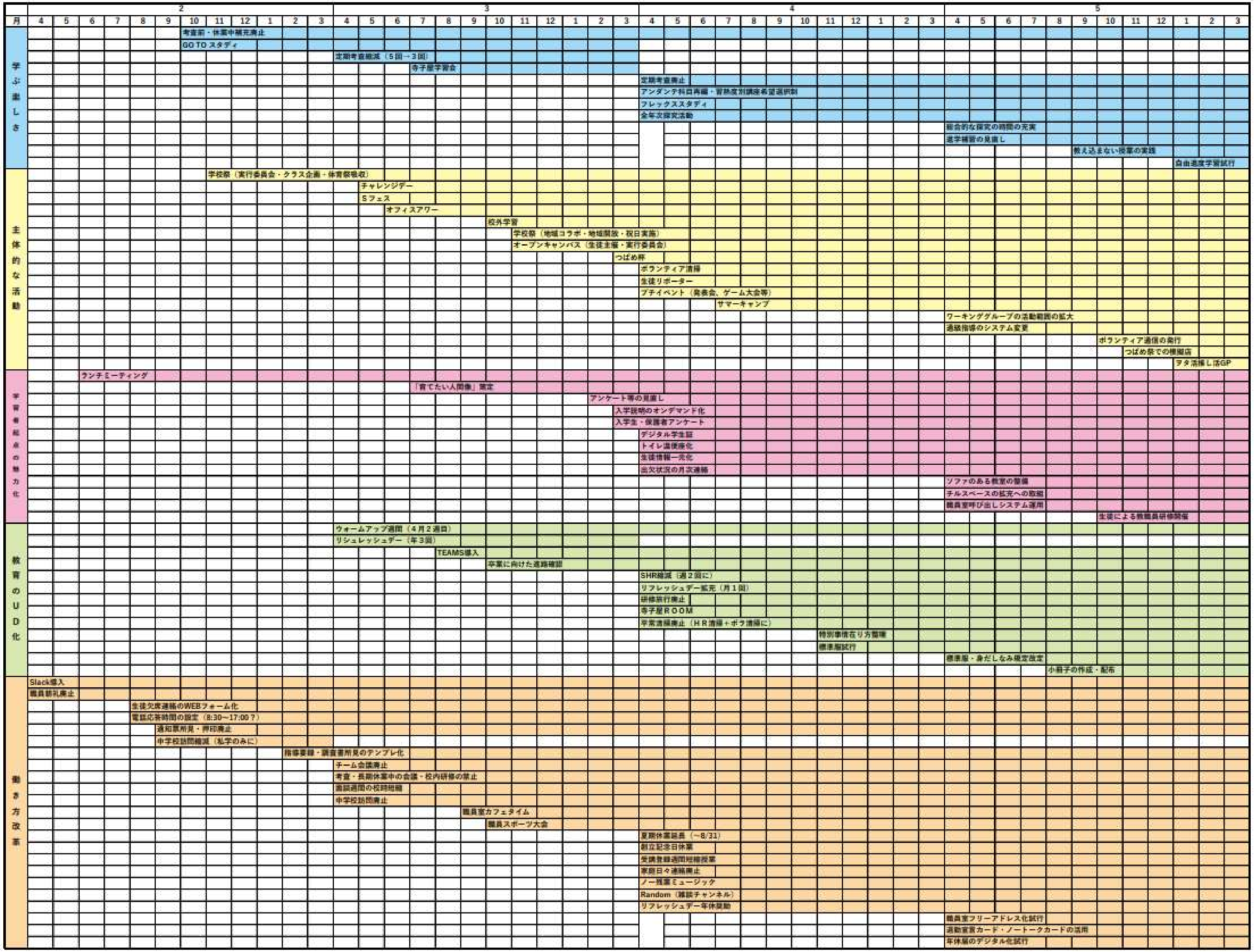
上の資料は・・・　今から10年前、まだ「清明」という校名すらなかったときに発行された、最初のパンフレットです。

当時のコンセプトや求める生徒像は今も大切に引き継がれ、教育活動に生かされています。その一方で、開校から９年目までに、生徒の実態や学校のリソース、社会の変化などに応じて、教育活動をアップデートすることに挑戦もしてきました。

私自身、副校長として着任以降「創立期から充実期への進化」としての改革を共に歩んできました。

ここ４年間の改革の軌跡を下の表にまとめましたので、御確認ください。それぞれの取組についての説明は省略しますので、新転任の先生方は、周囲の先生方に尋ねてみてください。

【改革の軌跡】


月
2
3
4
5
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3
学ぶ楽しさ
考査前・休業中補充廃止
GO TO スタディ
定期考査縮減（5回→3回）
寺子屋学習会
定期考査廃止
アンダンテ科目再編・習熟度別講座希望選択制
フレックススタディ
全年次探究活動
総合的な探究の時間の充実
進学補習の見直し
教え込まない授業の実践
自由進度学習試行
主体的な活動
学校祭（実行委員会・クラス企画・体育祭吸収）
チャレンジデー
Sフェス
オフィスアワー
校外学習
学校祭（地域コラボ・地域開放・祝日実施）
オープンキャンパス（生徒主催・実行委員会）
つばめ杯
ボランティア清掃
生徒リポーター
プチイベント（発表会、ゲーム大会等）
サマーキャンプ
ワーキンググループの活動範囲の拡大
進級指導のシステム変更
ボランティア通信の発行
つばめ祭での模擬店
ヲタ活推し活GP
学習者起点の魅力化
ランチミーティング
「育てたい人間像」策定
アンケート等の見直し
入学説明のオンデマンド化
入学生・保護者アンケート
デジタル学生証
トイレ温便座化
生徒情報一元化
出欠状況の月次連絡
ソファのある教室の整備
チルスペースの拡充への取組
職員室呼び出しシステム運用
生徒による教職員研修開催
教育のUD化
ウォームアップ週間（4月2週目）
リシュレッシュデー（年3回）
TEAMS導入
卒業に向けた進路確認
SHR縮減（週2回に）
リフレッシュデー拡充（月1回）
研修旅行廃止
寺子屋ROOM
平常清掃廃止（HR清掃＋ボラ清掃に）
特別事情在り方整理
標準服試行
標準服・身だしなみ規定改定
小冊子の作成・配布
働き方改革
Slack導入
職員朝礼廃止
生徒欠席連絡のWEBフォーム化
電話応答時間の設定（8:30~17:00？）
通知票所見・押印廃止
中学校訪問縮減（私学のみに）
指導要録・調査書所見のテンプレ化
チーム会議廃止
考査・長期休業中の会議・校内研修の禁止
面談週間の校時短縮
中学校訪問廃止
職員室カフェタイム
職員スポーツ大会
夏期休業延長（~8/31）
創立記念日休業
受講登録週間短縮授業
家庭日々連絡廃止
ノー残業ミュージック
Random（雑談チャンネル）
リフレッシュデー年休奨励
職員室フリーアドレス化試行
運動習慣カード・ノートークカードの活用
年休届のデジタル化試行

INDEX

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。今日お話しする内容は、次の４つです。

❶ 本校のコンセプト

❷ 入学から卒業まで

❸ 支援の方針

❹ ５つのアクションプラン

❶ 本校のコンセプト

【基本コンセプト】　　学びアンダンテ

「アンダンテ」とは、曲のテンポを表す音楽用語。
「歩くような速さで」という意味のイタリア語です。

流れる景色、軽やかなリズム、光る汗・・・。
風を切って走るのは気持ちいい。
でも、人のペースを気にしたり、少し無理をしてしまったりで、
自分のペースが乱れてしまうことだってあります。

そういうときは、ゆっくりでもいいから、少しずつでいいから、
歩きはじめればいい。「少」し「止」ってまた「歩」く。
千里の道も一歩から。

新たな一歩を踏み出すとして、自分のペースで学ぶとして、そうしたみなさんにとって無理なく過ごせる学校でありたい。だから、「アンダンテ（＝歩くような速さで）」をこの学校のコンセプトにしました。

（最初のパンフレットより）

【mission】－－－ 私たちの使命

学ぶ楽しさを提供する

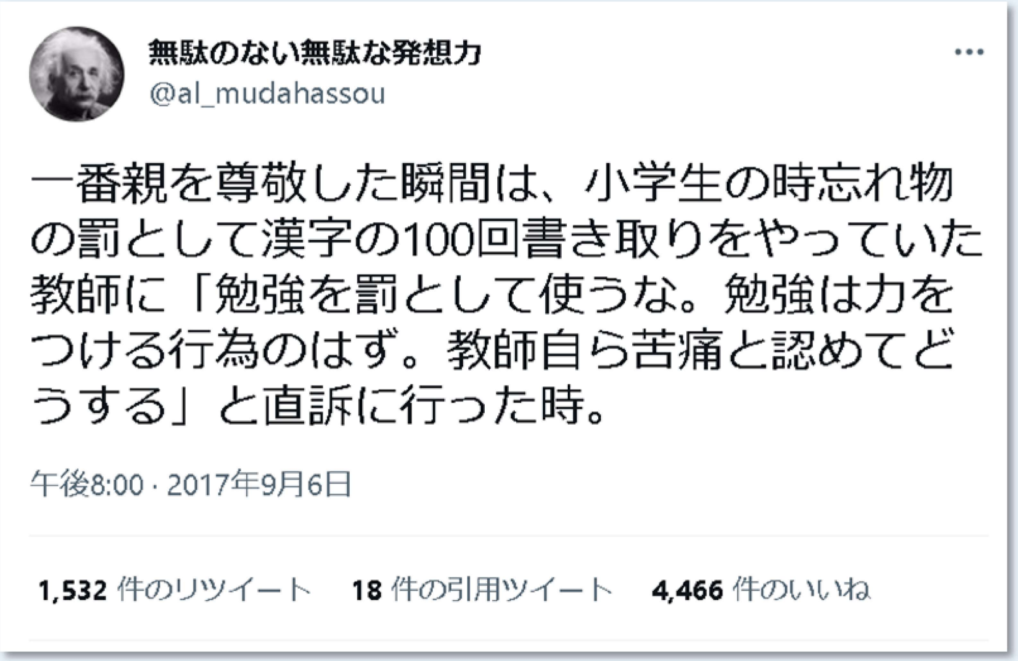
ミッション（私たちの使命）は「学ぶ楽しさを提供する」です。

高校時代にどれだけたくさん勉強したとしても、それが原因で勉強が嫌いになり、その後の８０年を学びから遠ざかって過ごすとすれば、それほど不幸なことはありません。清明高校では「高校時代にどれだけ学習したか」よりも「高校卒業後にどれだけ学びに向かえるか」を、そして「無理して学ぶ」ことよりも「好んで学ぶ」ことをなによりも重視しています。

単に教科書の中の知識やスキルを与えたり、問題の答えや解き方を伝えるのではなく、それらを通して「学ぶことの楽しさ」自体を届けたい。教科書を終わらせることより、「学ぶ楽しさ」を実感できることを大切にする、そういう学校でありたいと思っています。

そのためのアプローチを３つあげます。

　１つ目は、「学ぶ苦しさを提供しない」です。右のツイートは、７年ほど前のものですが、「学ぶ苦しさ」を提供してしまっている学校の悪い面が的確に言い表されています。このような、苦行としての勉強をやらされた生徒は、たとえやり切ったとしても、「やれやれ」とか「やっと解放される」という感想しか持たないでしょう。仮に罰としての勉強はさせていないとしても、やはり学校というのは、生徒たちに「学ぶ苦しさ」を提供し続けてきた、勉強が嫌いな生徒を一所懸命量産しつづけてきたという側面が少なからずあるのではないでしょうか。「学ぶ楽しさを提供する」ためには、なによりもまず**「学ぶ苦しさを提供しない」ということが大前提**で、そのためにここ４年間で実現した施策が宿題・補充・特訓等の廃止であり、定期テストの廃止であると言えます。



２つ目は、「学びの捉え直し」です。これは、従来の「学び直し」とはコンセプトが異なるということを確認しておきます。これまでの「学び直し」は、小・中学校時代の学習内容の復習や未定着箇所の再学習により知識・理解を補完し、高校での学習をスムーズに進めることが目的でした。しかし、本校にはさまざまな理由から、「わからない」「できない」「もういや」というように、学ぶことに強い苦手意識のある生徒が多数在籍しています。そうした生徒が、「わかる」「できる」「もっと」という体験を通じて**学習に対するイメージチェンジ**に至ること、つまり**「学びの捉え直し」**を最大のねらいとしています。ＡＩ学習アプリ「すらら」を用いた自学自習型の学び直し科目「フレスタ」やその中で行っている学習スタイル別の講座編制（右上図）は「学びの捉え直し」を最大の目的としています。

３つ目は、「好きや得意の伸長」です。１月のリフレッシュデー「ヲタ活推し活グランプリ」で堂々と披露する発表者とそれを受け入れるメディアルームの観客や「いいね！」ボタンを連打するリモート参加生徒。３月のつばめ杯「e-スポーツ」での熱い盛り上がり。さまざまなつまずきを経験し、人前でしゃべったり、イベントを仕切ることが苦手そうに見える生徒たちも、いざ自分の好きなことややりたいこととなれば、目を見張るような活躍を見せてくれます。その他、さまざまな行事を通して、多くの生徒たちが高いポテンシャルを持っていることを表明してくれています。推し活やヲタ活など、**自己の「好きや得意の伸長」を学校として奨励し、さまざまなアウトプットの機会を設け、楽しく充実した時間を共有する**ことで、生徒が自己肯定感や自己有用感を持ち、知的好奇心を持って高校卒業後も好んで学ぶ人になれると期待しています。

【vision】－－－ めざす学校像

つまずきのある人もない人も共に安心していきいきと学ぶ学校

ビジョン（めざす学校像）は「つまずきのある人もない人も共に安心していきいきと学ぶ学校」です。

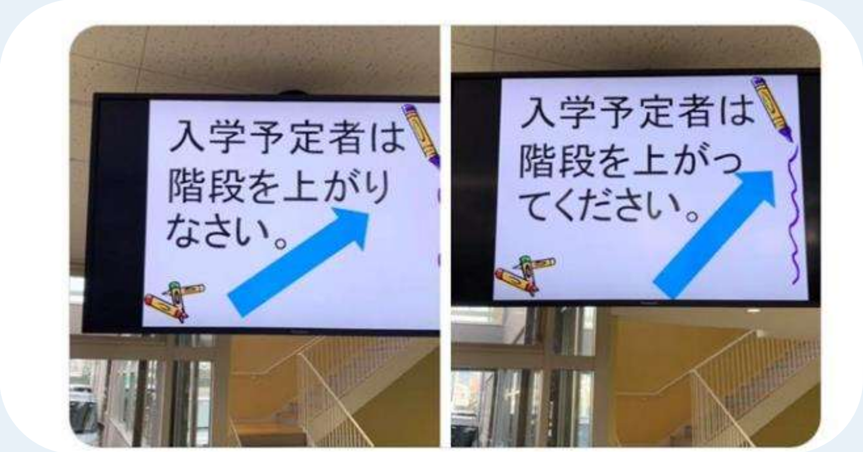
障害者のためだけの特別なものを作るのではなく、障害があろうがなかろうが、誰にとっても使いやすいデザインを考えるというのが、ユニバーサルデザインの考え方です。障害のある人にとって使い勝手がよいモノやコトは、障害のない人にとっても使い勝手がよい。それを清明高校に置き換えると、不登校やつまずきなどの経験がある生徒にとって利用しやすい教育は、そうでない生徒にとっても利用しやすい、ということになります。そういう発想で、日々の教育活動はもちろん、私たち教職員のマインドセットづくりにも努めます。そのようにして本校で培われた手法やマインドは、必ずや他の全日制高校にとっても大切で、必要不可欠なものとなると、私は確信しています。

【value】－－－ 大切にしたい価値観

生徒をリスペクトする　　倫理　　トライ＆エラー

バリュー（大切にしたい価値観）です。

上の３つを大切にしたい価値観としているのは、逆にこれらの３つが（清明高校に限らず）教職員としての私たちにはまだ足りていないと感じることがあるからです。



新入生向けのアナウンスを修正した例
（令和４年３月）

#01　生徒をリスペクトする

“respect”・・・。「生徒を尊敬する・・・？」。とても共通理解のむずかしい言葉です。参考にできるのは右の定義です。「存在そのものに価値があり、心身の苦痛を与えられたりぞんざいに扱われたりすべきでないという信念」と訳せるでしょうか。

> the belief that something or someone is important and should not be harmed, treated rudely etc
> （ロングマン現代英英辞典）

これまでの学校には、生徒を「人」としてではなく、ひどい時には、まるで動物やモノのようにコントロール可能な対象として接し、生徒の意向を軽んじ、頭ごなしに注意したり、バカにしたり、テキトーに応じたり、ごまかしたりしてきた面が少なからずありました。

「権力の非対称性」は学校が内包する極めて危険な基本的性格です。生徒を「子ども」扱いするのではなく、「大人」扱いするのでもなく、**私たちと同じ一人の尊厳のある「人」として尊重しつつ接する**ことが「リスペクトする」ということだと思います。

#02　倫理

　変化が激しく、複雑、あいまいで不確実な今の社会においては、法やルールの更新が現状に追いついておらず、校内規定等についても、改正作業の前に臨機応変な運用が迫られることが増えてきています。

　そうした中、生徒・保護者の信頼を損なうことのないよう、合理的な判断と迅速な対応をしていくためには、たとえ法やルールに定めがなかったとしても、社会通念に照らして「好ましくない」と思われる行動はとらないという「倫理」がとても大切です。例年、紹介されていますが、何か判断に迷うことがあったときには、次の文に立ち戻ってください。

> もし、このことが明日のワシントン・ポストの一面に載って全米中に知られることになったら、それを誇りに思うだろうか、それとも、恥ずべきことだと思うだろうか。
>
> マイケル・アブラショフ『即戦力の人身術』

#03　トライ＆エラー

　インプットも熟考も大切です。しかし、何よりもアウトプットを重視します。まずは、20%の出来でいいので試作に取り組み、失敗しながら何度もアウトプットを繰り返し、少しずつ前進して完成にたどり着きます。オンデマンド授業も、リフレッシュデーも、シン・会議も、はじめは**遊び心**と**「すぐやる、まずやる、ざっくりとやる」**です。

　生徒のチャレンジも、**大人がレールを敷きすぎず**に**小さな失敗をどんどん**させましょう。サマーキャンプやつばめ祭、総合的な探究の時間やフレックス科目も、私たちは手と口を出したいところをグッとこらえて、生徒の遊び心と好奇心を尊重し、トライ＆エラーができる環境作りに努めましょう。

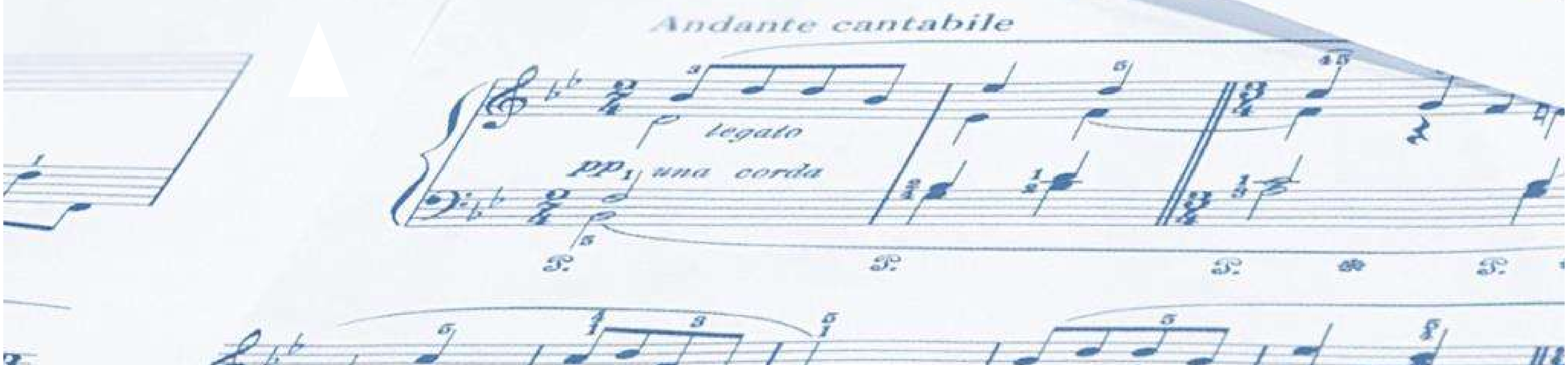
❷ 入学から卒業まで

【求める生徒像】

新たな一歩を踏み出すために

自分のペースで学びたい生徒

【育てたい人間像】

自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人

【求める生徒像】

新たな一歩を踏み出すために
自分のペースで学びたい生徒

・・・高等学校長が別に示す求める生徒像を十分理解し、当該高等学校での学習等に取り組む意志が明確であるもの。

（清明高校）

・・・かつ不登校経験のある者や、行動や認知の特性により学びに困りがある者など、学び直しを必要とする者であり、中学校長が作成する出願資格に係る副申書又は副申書に準ずる届があるもの。

（京都奏和高校）

上は、「京都府公立高等学校入学者選抜要項」に示されている出願資格です。京都奏和高校がつまずきや困りのある生徒に限定している一方、本校はそうした限定はしていません。どちらも大切なアプローチですが、両校の大きなちがいがここにあります。

ビジョンに「つまずきのある人もない人も・・・」とあるとおり、本校では「障害のある人と障害のない人が同じ場で学ぶ」というインクルーシブ教育の理念を踏まえつつ、さらに性的マイノリティ、外国にルーツのある人、ヤングケアラーなどを含む多様な生徒を受け入れます。このような**「分けない教育」**は守備範囲も広く、相互理解のハードルも高くなりますが、この教育のｄｅ＆ｉ（ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン）が本校のめざすところです。

【育てたい人間像】

自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人

自分の感情、思考、行動を俯瞰する。

メタ認知能力

自分の弱みを伝え、サポートを受ける。

受援力

自分にふさわしい持ち場を見つけ、力を発揮する。

自己実現力

　まず「自分を知る」。例えば、私は自分が視力がよくないということを**知っています**。ですから、視力を補うためにめがねをかけています。めがねを手に入れるためには、いいめがね屋さんを**紹介してくれる人**や、めがね選びの**アドバイスをくれる**人、視力を測ってレンズを**合わせてくれる**人など、「人とのかかわり」が必要です。そして「ポジションをとる」。視力を補えたので、本を読んだり、テレビを見ることが可能となり、**自分の考えや意見を持ったり**、人や案内板を識別して**行動する**ことができるようになります。このように目立った障害がなくても、人は視力のようにだれでも弱みを持っています。そして弱みは「朝が苦手」「よく忘れ物をする」「文字の読み書きが苦手」「集団が苦手」など、人によってそれぞれちがいます。そうした自分の特長を知って、人とかかわりつつ、社会の中で自分のポジションを見つける・・・

（R3学校説明会より）

❸ 支援の方針

【心理的安全性の3つのレイヤー】

全体アプローチ　個別アプローチ　マジョリティの不在

【土台となる考え方】

ニューロダイバーシティ　トラウマインフォームドケア

インクルージョン　社会モデル

【つばめ七則】

学習者起点　引き出す教育　長所の伸長　私たちが変わる

自信を返す　指導を伴う評価　伸ばす教育

【心理的安全性の3つのレイヤー】

令和５年度入学生の欠席日数（７月末段階）

中1	中2	中3	高1
8	0	108	55
0	194	144	49
0	0	36	45
67	82	103	45
0	118	116	42
0	72	63	39
0	118	125	39
0	9	115	34
0	12	38	33
0	167	125	24
0	0	0	21
0	141	72	18
0	6	59	17
0	51	82	17
0	127	120	17
0	1	0	16
0	180	117	15
45	19	33	12
0	0	0	12
0	6	123	12
0	6	10	12
11	121	102	11
0	10	6	11
0	57	88	11
0	0	3	10
0	134	86	10
5	4	54	10
107	175	116	9
0	1	21	9
0	0	0	9

中1	中2	中3	高1
11	138	115	8
0	115	29	8
181	120	56	7
0	41	129	7
0	2	49	7
0	75	31	7
7	3	124	7
0	67	61	6
0	14	24	5
0	69	103	5
0	31	107	5
0	130	97	5
0	5	16	5
42	69	14	5
21	74	80	5
68	115	23	4
0	11	4	4
0	11	6	4
14	16	72	4
0	74	4	4
2	4	8	4
0	1	1	3
8	12	53	3
0	62	52	3
0	10	10	3
0	10	45	3
0	100	15	3
0	76	121	3
52	42	30	3
1	5	15	2

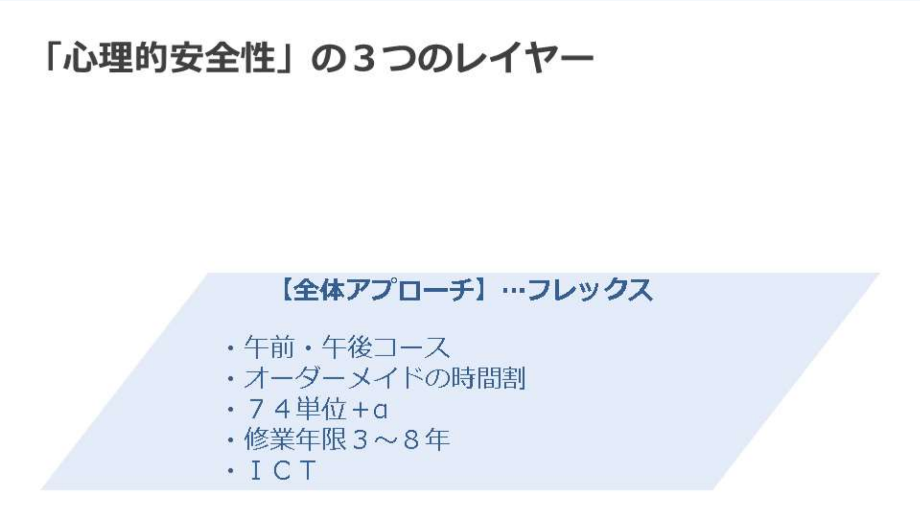
中1	中2	中3	高1
0	97	109	2
0	36	14	2
0	2	6	2
14	78	44	2
0	5	8	2
0	3	121	2
7	121	78	2
0	0	0	2
0	171	143	2
2	2	1	2
0	8	15	2
0	87	103	1
0	1	0	1
0	0	63	1
0	1	19	1
0	91	137	1
12	0	5	1
0	0	0	1
0	1	7	1
0	0	3	1
0	2	2	1
0	136	70	1
1	14	11	1
0	0	3	1
0	23	22	1
0	3	2	1
0	1	0	1
146	172	137	0
0	3	2	0
0	1	7	0

中1	中2	中3	高1
0	2	4	0
185	150	70	0
0	14	21	0
5	0	11	0
1	173	95	0
0	0	0	0
0	123	129	0
0	0	2	0
0	0	0	0
0	83	14	0
0	0	0	0
28	30	50	0
1	0	1	0
0	3	0	0
0	200	152	0
0	0	0	0
0	1	0	0
0	3	7	0
3	1	0	0
0	3	4	0
0	0	114	0
0	0	0	0
0	19	11	0
0	6	5	0
0	39	68	0
0	10	31	0
0	0	0	0
0	133	53	0
0	14	4	0
0	0	0	0
1	4	7	0

上の表は、昨年度（Ｒ５）の入学生１２１名の欠席日数を表にしたものです。左から中学１年、２年、３年、高校１年の欠席日数で、中学校で年間３０日以上の欠席にはオレンジのマーカーをつけています。高校の欠席日数は入学してから７月末までの欠席日数で、欠席の多い順に、左上から右下にソートしています。

やはり、本校には長欠経験者が多数入学してきているということがわかります。左上には、すでに高校での欠席が３０日に達するなど、思うように登校できない生徒もいますが、その他のほとんどの生徒が順調に学校生活を送っていました。

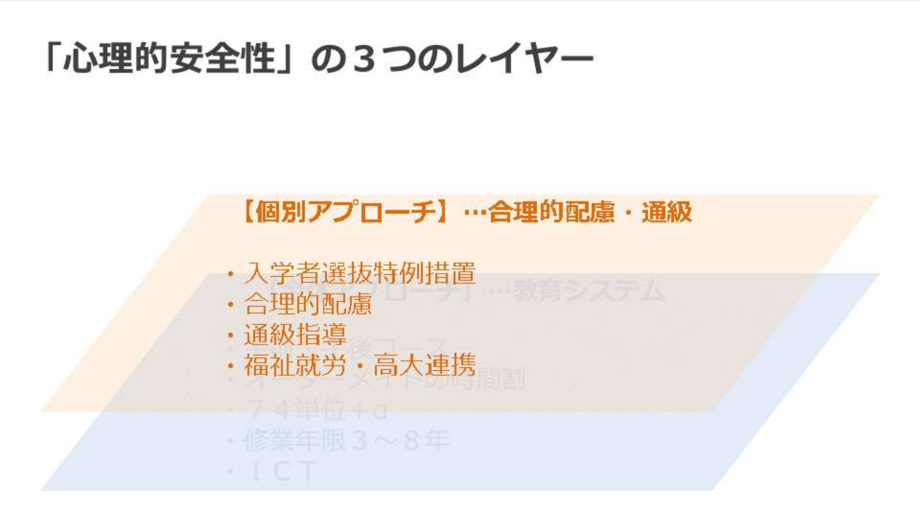
どうして登校できているのか？　それには心理的安全性が大きく影響しており、特に清明高校が生徒に提供している心理的安全性には、大きく３つのレイヤーがあると考えています。



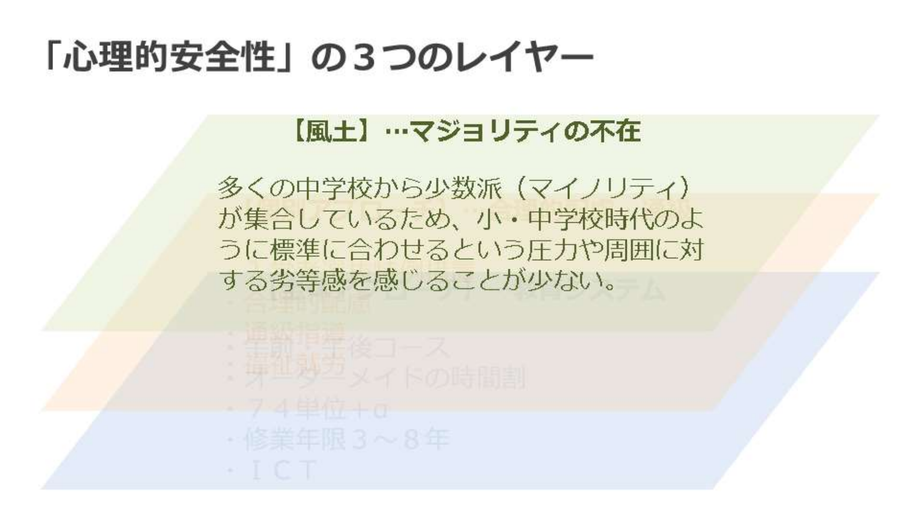
１つ目のレイヤーは【全体アプローチ】です。時間帯・時間割・修得単位数や修業年限などを自分のペースに合わせてフレキシブル

に選べるという「教育システム」です。

２つ目のレイヤーは【個別アプローチ】です。入学者選抜での特例措置にはじまり、合理的配慮や通級指導などがこれにあたります。



３つ目のレイヤーは【多数派（マジョリティ）の不在】です。本校には多くの中学校から少数派（マイノリティ）が集まってきているため、小・中学校時代のように**標準に合わせるという圧力や周囲に対する劣等感を感じることが少なく、それが生徒の心理的安全につながっています。**特に本校の場合は、「みんなそれぞれ、なんらかのつまずきや困りを経験してきている」、しかもそれは**「自分だけではない」ということを、生徒たちもお互いにわかり合えている。**そういう風土が、心理的安全性にとても大きな影響を及ぼしています。



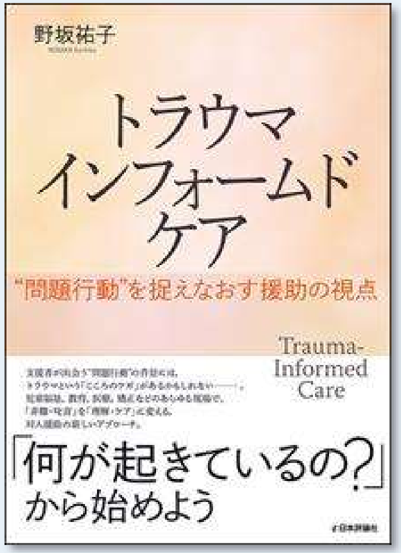
【土台となる考え方】

ニューロダイバーシティ　**トラウマインフォームドケア**

インクルージョン　**社会モデル**

　これら３つそれぞれのレイヤーで、「自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人」を育成する、言い換えれば、「メタ認知能力」「受援力」「自己実現力」を生徒に身につけさせるための土台となるのが、「ニューロダイバーシティ」「トラウマインフォームドケア」「インクルージョン」「社会モデル」という４つの考え方です。

　これからの説明には、下の書籍とを参考にしています。



#01　ニューロダイバーシティ

「ニューロダイバーシティ」とは、Neuro（脳・神経）と Diversity（多様性）という2つの言葉を組み合わせた造語で、「脳や神経、それに由来する個人レベルでの様々な特性の違いを多様性と捉えて相互に尊重し、それらの**違いを社会の中で活かしていこう**」という考え方です。

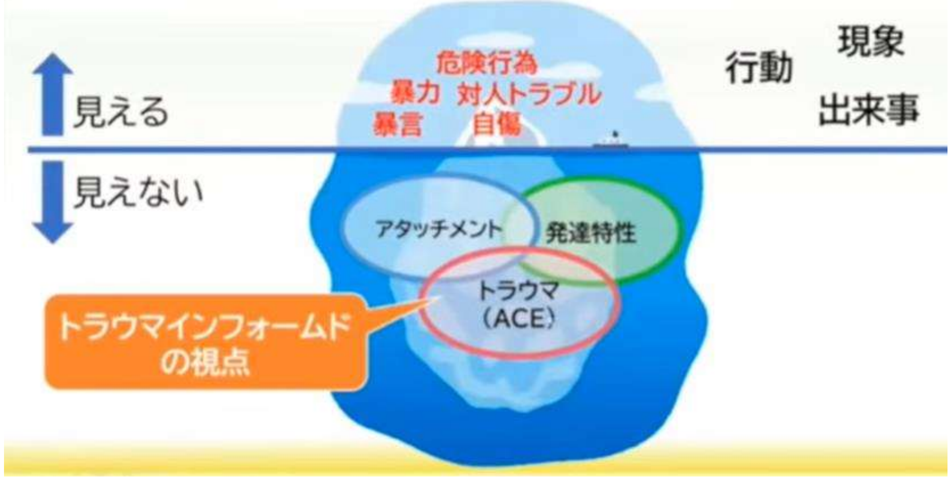
これには、障害者雇用という言葉についてまわりがちな「働く能力の低いかわいそうな人を福祉的な意義で採用してあげる」ということではなく、例えば、自閉スペクトラムの特性が生み出すことの多い「高度な詳細さ、強力な論理的・分析的思考、綿密な検査、ゼロエラー耐性を必要とする作業機能を実行する」スキルをプラスに捉え、それを活用するなどの、**積極的な文脈**が含まれています。

清明高校では、「発達障害は多様性の一つであり、尊重されるべき」というニューロダイバーシティの考え方を土台の一つとしています。

#02　トラウマインフォームドケア

　暴言や無気力、わがまま、暴力、危険行為などに接したとき、私たちはそれを生徒個人の特性に起因させてしまいがちで、その引き金や背景にはなかなか意識が向きません。でも、もしかすると、その生徒の言動は、過去の傷つきへの防衛反応なのかもしれません。

　外から見て「問題行動」に見える言動は氷山の一角に過ぎず、なぜその言動が起きているのかを「見える化」する視点が必要です。そして、そのために「めがね」の役割を果たすのがトラウマインフォームドケアです。**「もしかしたらトラウマによる傷つきを抱えているのかもしれない」というまなざしを持って相手に接する**というトラウマインフォームドケアの考え方も、清明高校が大切にする土台の一つです。



八木淳子「子どものトラウマの理解とケア」より

#03　インクルージョン

「インクルージョン」が言われて久しいですが、日本ではまだまだ正確に理解されていないようです。本田秀夫氏が著書でインクルージョンの誤解について述べておられますので、右に紹介します。

インクルーシブ教育を誤解している人たちは「多様な人たちが同じ活動に同じ参加の仕方をする」と捉えますが、清明高校では、**「多様な人たちが個に応じた活動に多様な参加の仕方をする」**と捉え、この適切なインクルージョンという考え方を土台の一つとしています。

よく誤解されるのですが、「平等な参加なのだから、みんな一緒に同じことをしなければいけない」と思いがちです。特に日本人は往々にして、皆で同じことをすることを美徳と考えがちです。これは、インクルージョンとは違います。

自閉スペクトラム症の子どもの場合には，対人関係が苦手です。一部の親は，たくさんの子どもたちの中に入っていると，良い刺激を受けて，自閉スペクトラム症の子どもでも，対人関係が改善し，社会性が身につくのではないかと期待する人がいます。でも，それはたくさんのアヒルの子どもの群れの中に，白鳥の子どもを入れておくと，良い刺激を受けて，白鳥がアヒルになるかもしれないと期待するのと同じくらい無理な話かもしれないのです。

#04　社会モデル

「医学モデル」は、障害は病気や怪我に起因する個人的な問題であり、医療の専門家による治療か個人の努力によって適応すべきものという考え方です。障害者はリハビリ等を通して健常者に近づき、健常者社会に適応していくことが求められます。

これに対して**「社会モデル」**は、障害は障害者にではなく社会のほうにあると考えます。例えば、階段しかなければ車イスの人は２階に上がれませんが、エレベータがあれば上がれます。この場合、障害は「車イスの人であること」ではなく、「階段しかないという環境」、つまり社会のほうにあると考えます。

「社会モデル」は、2006 年に国連で採択された「障害者権利条約」で考え方が示されており、日本の改正「障害者基本法（2011）」においても、この考え方が採用されています。清明高校は、**障害は、障害のない人を前提とした環境・しくみや考え方を作ってしまっている社会の側の問題である**という「社会モデル」の考え方を土台としています。

【つばめ七則】

そして、この４つの土台となる考え方を、発達障害やトラウマだけではなく、疾病、アタッチメント（愛着形成）、家庭の状況、アディクション（依存症）、性自認などにも広く適用し、指導・支援を行っていきます。その際の方針を知ってもらうため、茶の湯の心得「利休七則」に照らしつつ、指導・支援の心得「つばめ七則」を御覧ください。

指導・支援

発達障害　トラウマ　疾病　アタッチメント
家庭の状況　アディクション　性自認　・・・

土台となる考え方

ニューロダイバーシティ　**トラウマインフォームドケア**
適切なインクルージョン　**社会モデル**

#01　茶は服のよきように点て
・・・「指導者起点」から「学習者起点」へ

　茶の点てやすさではなく、茶の飲み心地を第一に点てなさいという心得です。つまり亭主の都合ではなく、客のためにどう点てるか。これは、客の好みや都合に合わせるということではなく、「今、ここ、この客」に最も適した一服を亭主が心を込めて提供するということだと思います。

　教師にとって都合がよいかどうかという「指導者起点」ではなく、生徒にとってそれが有効かどうかという「学習者起点」で指導・支援していくことが大切です。現在の教育活動やしくみ・手続きが学校の都合だけで進められていないか、授業やホームルーム、部活動での指導・支援が教師の自己満足になってしまっているところはないか、絶えず振り返るとともに、逆に生徒にとってマイナスになることは、たとえ生徒・保護者の要望であっても受け入れないという、教育機関としての毅然とした姿勢も必要です。

#02　炭は湯の沸くように置き

・・・「教え込む教育」から「引き出す教育」へ

しっかりとお湯が沸くように火をおこすためには、最初の炭の置き方にこそ最も注意を払いなさいという心得です。これは、炭の能力（材質や形状、色）をしっかり見極め、釜を据える前に炭を最適な状態に置き、その後は炭の燃えるに任せて「松風（最もよい湯加減）」を待つということだと思います。

生徒はだれでも何らかのポテンシャルを持っています。教師が上から一方的に与え、身につけさせるという手法ではなく、生徒の潜在能力を信じ、生徒が自分自身で気づき、主体的に学び、成長することをサポートするという手法が「引き出す教育」です。

例えば、本校の「総合的な探究の時間」として過去に行っていた社会的自立支援プログラム「みらい」では、同じメニューをすべての生徒に与え、身につけさせるという「教え込む教育」の手法がとられていました。さまざまな困りのある生徒を想定した目的や内容はすば

らしいものでしたが、個々の生徒からすれば、すでに身についているため不必要なメニューや、どうしても抵抗感があって取り組みたくないエクササイズなどが生じてしまうため、必ずしも最適なプログラムとは言えませんでした。もちろん、現在の「探究活動」もすべての生徒に最適というわけではありませんが、「探究活動」でのグループ研究・発表の様子や「チャレンジデー」での取組テーマやオンライン上での発表・チャットの様子を見る限り、主体的な活動を通して気づき学ぶという「引き出す教育」によるプラスの効果が徐々に出てきていると感じています。

また、今後は教師の役割や仕事内容が変化する可能性があります。特にChatGPTをはじめとするＡＩの出現により、すでに教科書に書かれていることを教えるという役割は、早い段階でなくなるだろうと思います。

ティーチャーから脱却して何になる？

コーチは、①新しい気づきをもたらす、②視点を増やす、③考え方や行動の選択肢を増やす、④目標達成に必要な行動を促進するために効果的な対話を作り出し、生徒が主体性を持ちながら自己実現を果たせるようサポートします。**キュレーター**は、美術館などの展覧会の企画・構成・運営などをつかさどる専門職です。点と点を線でつなぎ、活用を重視して知識を教養に高めてくれる存在です。**ファシリテーター**は、ワークショップが典型ですが、発言を引き出し、共有・整理し、生徒が新たなアイデアや問題解決策を出せるよう導く進行役です。**コーディネーター**は、授業や行事のニーズに応じて外部人材とつながり、生徒に新たな知見や刺激をもたらす人です。

#03　花は野にあるように

・・・「短所の克服」から「長所の伸長」へ

いわゆる茶花の「投げ入れ」のとおり、自然の中に咲いている本来の姿のように生けなさいという心得です。つまり、「生け花」のように技巧を凝らしたり、華やかに飾ったり、種類を取り合わせたりするのではなく、野にある自然の美しさをそのままに引き出すということだと思います。

私たちはともすれば生徒のマイナス部分にフォーカスし、「短所の克服」や「苦手の解消」というもっともらしい言葉で生徒本来の魅力を台無しにしてしまいがちです。しかし、時には曲がった枝も好んで選び、その花の本質や自然そのものの美しさを表現するという「投げ入れ」の感性を大切にし、短所の克服の前にまずは思い切って長所を伸ばす、好きや得意なことに躊躇なく打ち込ませることを優先したいと考えています。

ピアノの発表会やゲーム大会などのプチイベント、つばめ杯でのパフォーマンス、そして、制服の標準服化も、生徒の「長所の伸長」「好きや得意の伸長」に資する取組だと思います。

また、清掃ボランティアや、広報ボランティアでは、生徒自らが自分の得意なことを生かして、多くの人に働きかけ、成果と充実感を得られています。

一昔前であれば、頭髪加工＝「素行不良」でしたが、今では頭髪加工＝「ファッション」であり、「好き」や「自分らしさ」の表現です。ぜひ、笑顔で応援してあげてください。

好きなことであれば、自分で選んだことであれば、たとえ乗り越えなければいけない困難や課題に出会ったとしても、なんとか乗り越えられる可能性があります。そうすれば、やり抜く力も集中力も、忍耐力も回復力も自ずと身についてきます。短所の克服はそれからでも遅くありません。

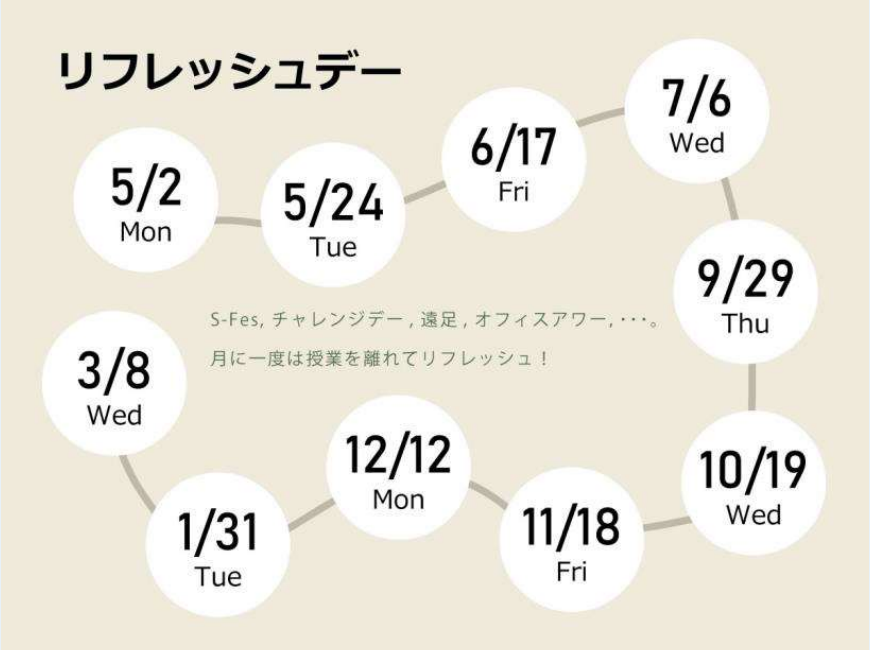
#04　夏は涼しく冬暖かに

・・・「生徒を変える」から「私たちが変わる」へ

　さりげない視覚や聴覚などの表現を使って「涼」や「暖」を感じさせる趣向を凝らしなさいという心得です。利休の時代はエアコンがありませんから、夏であれば露地に打ち水をしたり、床に「涼一味」の軸を掛けたりして「涼」を演出して心安まる空間（＝環境）を創造しました。これは、客に我慢を強いるのではなく、感性による工夫という主人の心がけよって、少しでも過ごしやすいように客をもてなすということです。

　不登校は、「はじまり」ではなく「結果」です。生徒は、学校へ行きたくなくなっても誰にも相談できず、我慢して登校するようになりますが、我慢が限界に達してほんとうに登校できなくなるとき、つまり不登校の状態になったときには、かなり疲弊した状態になっています。特に本校では、特性に対する家庭や学校の理解不足と不適切な対応により、生活上の支障が引き起こされ、二次的な問題を生じた結果として不登校に至った生徒が多数を占めて

います。そのような生徒にとって必要なのは、登校刺激ではなく、環境調整です。そのため、清明高校では考査前補充・定期考査・研修旅行等の廃止、ウォームアップ週間やリフレッシュデーの設定、ＳＨＲの回数削減、講座や行事参加における希望・選択制の導入など、単に生徒に我慢を強いるのではなく、教育効果の維持に配慮しつつ、教育活動やしくみ・手続きを生徒に合わせてカスタマイズしています。



　変わるべきは障害者ではなく社会です。「生徒を変える」前に「私たち（＝環境）が変わる（＝調整）」。人が困りや生きづらさなどを感じている場合に、「困り」がそもそも起きにくいように環境を整えていくことが重要です。

環境調整の一環として、カームダウン・クールダウンスペースや、センサリールームを新たに整備したり、寺子屋ROOMを設置するなど、多様な生徒が自分らしく過ごせる場所を用意することで、学校に通いやすくなる取り組みを進めてきました。

それらの取り組みでは、ワーキンググループ等での生徒からの声を大切にしながら、遊び心も忘れない、清明高校らしい活動となっていることが印象的です。

チルスペース一覧

清明高校では、生徒のみなさんが気持ちの切り替えをしたり、安心して落ち着くことができる空間を整備することで、多様な人が共に安心して学ぶことができる環境づくりを進めています。お互いが気持ちよく過ごせるよう、他者への思いやりをもちましょう。

名称	設備	利用目的	ルール
カームダウン ・クールダウンスペース	机・椅子 パーテーション	クールダウン/黙食など	１人専用 飲食可
センサリールーム（相談室３） 【R５.１月～３月まで試行】	机・椅子 タッチ式ライト スピーカー	五感の刺激軽減 リラックス	予約制（保健室）＊時間限定 １人専用 食事禁止
チルラウンジ	ソファ/テーブル 観葉植物　など	休息/談話/食事/学習	飲食可
203 教室	ソファ 各種チェアー/机	休息/談話/食事/学習	飲食可 ＊授業・部活・会議等優先
自習室	机・椅子 パーテーション	個別学習	食事禁止
クワイエット・スタディスペース	机・椅子 卓上パーテーション	個別学習	飲食可

【留意事項】＊授業がある生徒は使用できません。
＊必ず利用目的に沿った使い方をしましょう。ルールは必ず守りましょう。

#05　刻限は早めに

・・・「自信を与える」から「自信を返す」へ

　常に自分の中の時計の針を進めておき、心にゆとりを持って人と接しなさいという心得です。これは、「５分前集合」のこと、つまり人を待たせないよう時間を守るということを言っているのではなく、むしろその逆で、待たされてもストレスを感じないぐらいの余裕と寛大さ、心のゆとりを持てということだと思います。

　学校教育は、「教育の機会均等」と「体系的･組織的な教育」を柱に、これまで大きな成果をあげてきました。その一方、学力や運動能力、協調性という面で相性が合わない生徒たちは、学校の中で生活することで、周囲から好ましくない評価や圧力を受け、次第に自信を奪われてきました。そうした前提に立って、私たちは「意識しなければ生徒の自信を奪ってしまいがちである」というということを自覚し、「自信を与えることよりも、まずはこれ以上自信を奪わないこと」を第一に心がけるべきだと考えています。そのためには、否定されず、

他者と比較されず、失敗が咎められない環境、つまり「安心して失敗できる環境」づくりが大切です。

　失敗は一時的なつまずきに過ぎず、学んだり改善したりするための貴重なチャンスです。学習の多くは失敗という体験に基づいており、多くの人間は失敗しながら前進します。ところが、失敗を責め、笑い、叱ることはないにしても、失敗しないよう先回りして手を打つ、アドバイスをするという親や教師の行為はよく見られます。こうした過保護・過干渉は、「失敗はよくない」というメッセージとなって生徒の心に届きます。

　例えば、サマーキャンプについても、教員が生徒に無理に参加を働きかける行為は、「不参加＝失敗 → ダメな人」というメッセージになりえます。「地獄への道は善意で敷き詰められている」ということわざがありますが、われわれが善意で、無意識に生徒の自信を奪うことのないよう、長い目をもって付き添うという心のゆとりをもちたいものです。「行っとけばよかった」という傷の浅い小さな失敗を経験し、次年度に参加する。これが本校のねらいであり、清明高校は、上手にたくさんの失敗を経験するための場所でありたいと思います。

#06　降らずとも傘の用意

・・・「指導を伴わない評価」から「指導を伴う評価」へ

　不測の事態を想定し、備えを怠らないようにしなさいという心得です。先を読むとともに、何が起こっても適切に応じられるやわらかい心を持ち、必要なものを備えることにより、客に憂いを持たせないという、亭主に必要な気遣いが示されています。

　「傘」は、雨という現在とは異なる状況になった時に必要となる備えですが、ここでは生徒を評価する上での様々な工夫にたとえたいと思います。例えば、文字を書くことに困難がある生徒の場合、誤字やひらがなをその都度減点すると、その教科の理解度や考え方の評価ではなく、書字能力の評価になってしまい、これは学習指導要領上、その生徒の能力を正当に評価しているとは言えません。また、忘れ物が多く、提出物が出せない生徒には、事前のリマインドやその場で課題に取り組ませる等の指導者側の工夫（＝傘）が必要です。しかし、学習面で困難を抱える生徒について、単に合格基準を引き下げるなど公平性を損なうような

評価はできません。学校としては、その段差を乗り越えないでよしとするのではなく、段差を乗り越えるためのスロープや手すりを用意し、生徒が成就感と達成感を持って乗り越えるための支援を行います。

　清明高校では、手立てを講じることのないまま単位を認定する・しないという「指導を伴わない評価」ではなく、例えば、生徒の以前の状況と比較した進歩の度合いを評価する「個人内評価」や「代替手段による評価」を取り入れ、個々の生徒に応じて設定した目標をやり切らせて単位認定につなげるという、「指導を伴う評価」をお願いしています。ここで例にあげた「個人内評価」や「代替手段による評価」が上の文のスロープや手すりにあたり、利休が例にあげた「傘」にあたります。

保健室と体育館の間のスペースです。スロープや手すり、３段・６段の階段のように、指導と評価のバリエーションが求められます。

#07　相客に心せよ

・・・「そろえる教育」から「伸ばす教育」へ

　互いに気遣い、思いやる心を持つようにしなさいという心得です。同席した客として縁あって居合わせたのだから、互いに尊重しあい、楽しいひとときを過ごそうということです。

　本校には多くの中学校から少数派（マイノリティ）が集まってきているため、小・中学校時代のように標準に合わせるという圧力や周囲に対する劣等感を感じることが少ないこと、また、つまずきや困りを自分以外も経験してきていることを互いにわかり合えているという安心感が存在していることについて、すでに述べました。

　加えて、清明高校では、他校で行われているような過剰訓練、つまり苦手を克服させるための度重なる注意・叱責や過重な訓練・反復練習などは、一切行わないこととしています。私たちは、視力が衰えれば訓練による回復ではなく眼鏡による補完を行います。黒板をひっかく音に対してはそれに慣れるまで反復練習するのではなく耳を塞ぐことが大切です。とこ

ろがいざ教育活動になると、それぞれの特性に応じた配慮･援助が忘れられ、遠く離れた小さい文字を読み取る特訓や黒板をひっかく音に耐える訓練のような理不尽な指導、いわゆる過剰訓練が行われることがあります。

　昨年度は、生徒からの発案で、学習障害や感覚過敏、化学物質過敏症、ＬＧＢＴＱなどの当事者生徒が、日常の困りと学校生活への提案を話してくれる教職員研修「清明ダイバーシティ・ピッチ」を実施しました。また、生徒と教職員が同じテーブルを囲んでだれもが参加しやすい授業を提案し合う、対話型研修も開催できました。これらの取組を通して、支援とは当事者の声を聞き、それぞれの特性に応じた援助を共に考えることとの認識が深まりました。

　教育の目的は、今ある社会に順応する人を育てること（＝「そろえる教育」）ではなく、今ある社会の在り方に疑問を持ち、よりよいものへと変革していける、言わば型破りでユニークな出る杭を育てること（＝「伸ばす教育」）にあります。

❹ アクションプラン

本年度の学校経営　５の重点と10のキーワードです。

#1　学ぶ楽しさ

■指導と評価の工夫改善　■授業のＤＸ（個別最適・自由進度）

#2　主体的な活動

■サードプレイス　■探究活動

#3　学習者起点

■潜在的ニーズ　■バイアス払拭

#4　教育のＵＤ化

■特性についての理解　■持続可能な教職員研修

#5　働き方改革

■ダイバーシティ　■ワークライフバランス

【指導と評価の工夫改善】 #1 学ぶ楽しさ

一斉一律の授業をして（＝指導）知識の量を試験で測る（＝評価）という従来の方法と決別し、定期考査の廃止、「フレスタ」や「フレスタグリーン」の設置、学習スタイル別講座編制、探究活動の充実などの改革を行ってきました。また「欠課過多によらない単位不認定の解消」もほぼ実現できています。今後も個別最適な学びと協働的な学び、多面的・総合的な評価を推進し、「学ぶ楽しさ」の提供を加速させたいと考えています。

フレスタグリーン

探究活動

2022.10.25　京都新聞

【授業のＤＸ】　　#1 学ぶ楽しさ

ＳＡＭＲ（セイマー・モデル）

❶ Substitution（代替）

機能的な拡大なし、従来のツールの代用

- 紙　→　デジタル
- 鉛筆　→　アップルペンシル
- ラジカセ　→　タブレット

❷ Augmentation（増強）

代用に加え、新たな機能が付加

- 板書・教材提示・ノート提出の効率化
- 写真・動画撮影

❸ Modification（変容）

実践の再設計を可能に

- 模範演奏・遅延動画による個別学習
- 発言・発表のオンライン化

❹ Redifinition（再定義）

以前はできなかった新しい実践を可能に

- リモート授業・グループワーク
- オンデマンド反転学習
- 個別最適化学習（AI機能アプリ）
- 脱TEACHER

上の資料は・・・令和３年11月のＩＣＴフロンティアキャンプで示されたものです。❶から❹へと順にＩＣＴ活用が深まっていきます。

本校では、❶「代替」（紙がデジタルデータになったり、プリントへ鉛筆で書き込まなくても直接タブレットに入力できるようになるなどアナログのツールがデジタルツールに置き換わるという段階）と、❷の「増強」（板書やノートテイク、配布・回収など、これまでの手間が省けたり、スピードが上がったりという効率化）は実現できています。❸「変容」は従来の授業ではできなかったことが、ＩＣＴの導入によって実現できている、授業をリデザイン（再設計）する段階です。例えば、人前で発言することが苦手な生徒が、ICTの活用によって抵抗なくできたり、教師がいくらいても足りないような指導が可能になったりと、これまでとは異なる授業の風景が立ち現れます。

　最後の❹「再定義」は従来の授業スタイルを否定する、あるいは破壊して根本から見直し、革新を図る段階です。たとえば「同じ時間」「同じ場所」にこだわらない授業、教師が教えない授業、ＡＩを使った個別最適な学習などです。

　昨年度以来、オンデマンド動画を活用した個別最適化の授業や、多様な課題から生徒自身が目標・計画を立てて学習に取り組む自由進度学習を、多くの先生方が取り入れています。

　❶「代替」❷「増強」という、従来の授業を強化する段階から、❸「変容」❹「再定義」という、従来の授業を破壊し再創造する段階へ。この変化こそが**ＤＸ**であり、ＩＣＴ導入の目的です。今年度もさらなる活用で、生徒が主体的・協働的に学ぶ授業の研究・実践を進めていきます。

【授業のＤＸ】

ＤＸの具体的な在り方とは、例えば・・・

▶ オンデマンド化

授業のライブ配信は、授業の劣化コピーです。そうではなく、1.5倍速やスキップ、リピート再生等により、生徒が個に応じて利用できるよう、オンデマンド化すべきです。

→ **いつでも、どこでも、だれでも、なんでも、どのようにでも、…**

▶ アプリの有効活用

英単語や漢字練習、その他の教科科目においても、非常にすぐれたアプリが無料で使えます。プロが作ったすばらしいツールがあるのに、小テストを自作し、どの生徒にも一律に同じ内容のドリルをさせるのは効果的ではありません。

→ **自前主義から脱却しましょう**

▶ 新しいものは積極的に活用

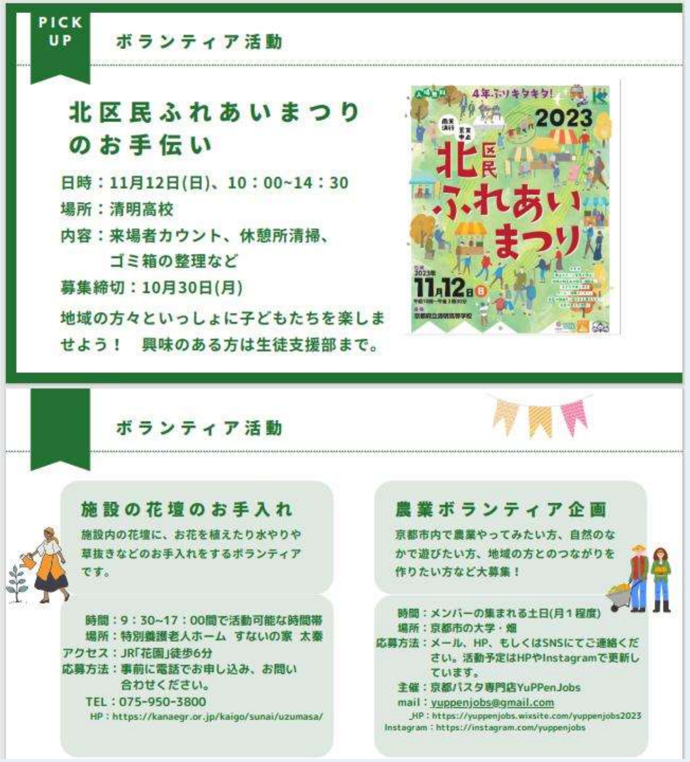
コメントやチャットの活用は本校でも進んできました。フレスタやつばめ杯でＶＲの利用にも取り組んでいます。ChatGPT などのＡＩツールもどんどん活用してください。

→ **「目的・用途」よりも「使ってみる」が大切です。**

【サードプレイス】 ＃2 主体的な活動

ファーストプレイスは「家庭」、セカンドプレイスは「学校」です。ほとんどの高校生は、「家庭」と「学校」のみで生活しています。ここにサードプレイス、家庭でも学校でもない場所、家族でも教師でもない人を提供することで、生徒に刺激や自信を届けたいと思います。

つばめ祭の「地域コラボ」もその一つですが、学校が安全基地（ベースキャンプ）の役割を果たしつつ、生徒を居心地のよいホームからスリリングなアウェイへ送り出す。学校外の舞台や人とのやりとりを経験することは、生徒のステップアップにとても大きな効果をもたらします。これも「教え込む教育から引き出す教育へ」の一環です。その他、ボランティアやコンテストなどへの参加もどんどん奨励したいと思っています。


PICK UP
ボランティア活動

北区民ふれあいまつり
のお手伝い

日時：11月12日(日)、10：00~14：30
場所：清明高校
内容：来場者カウント、休憩所清掃、
ゴミ箱の整理など
募集締切：10月30日(月)

地域の方々といっしょに子どもたちを楽しませよう！　興味のある方は生徒支援部まで。

ボランティア活動

施設の花壇のお手入れ

施設内の花壇に、お花を植えたり水やりや草抜きなどのお手入れをするボランティアです。

時間：9：30~17：00間で活動可能な時間帯
場所：特別養護老人ホーム すないの家 太秦
アクセス：JR「花園」徒歩6分
応募方法：事前に電話でお申し込み、お問い合わせください。
TEL：075-950-3800
HP：https://kanaegr.or.jp/kaigo/sunai/uzumasa/

農業ボランティア企画

京都市内で農業やってみたい方、自然のなかで遊びたい方、地域の方とのつながりを作りたい方など大募集！

時間：メンバーの集まれる土日(月１程度)
場所：京都市の大学・畑
応募方法：メール、HP、もしくはSNSにてご連絡ください。活動予定はHPやInstagramで更新しています。
主催：京都パスタ専門店YuPPenJobs
mail：yuppenjobs@gmail.com
HP：https://yuppenjobs.wixsite.com/yuppenjobs2023
Instagram：https://instagram.com/yuppenjobs

令和5年10月「未来へのとびら」生徒支援部

【探究活動】 ＃2 主体的な活動

「発表が苦手」「基礎が身についていない」という理由から、数年前の本校では探究活動が積極的に行われていませんでした。しかし、チャレンジデー（リフレッシュデー）や総探での様子を通して、多くの生徒たちが高いポテンシャルを持ってることを、多くの教職員が確信しました。今年度からは、年次の枠を飛び越えた探究活動も導入し、さらに学ぶ楽しさを実感できる時間を増やしていく予定です。

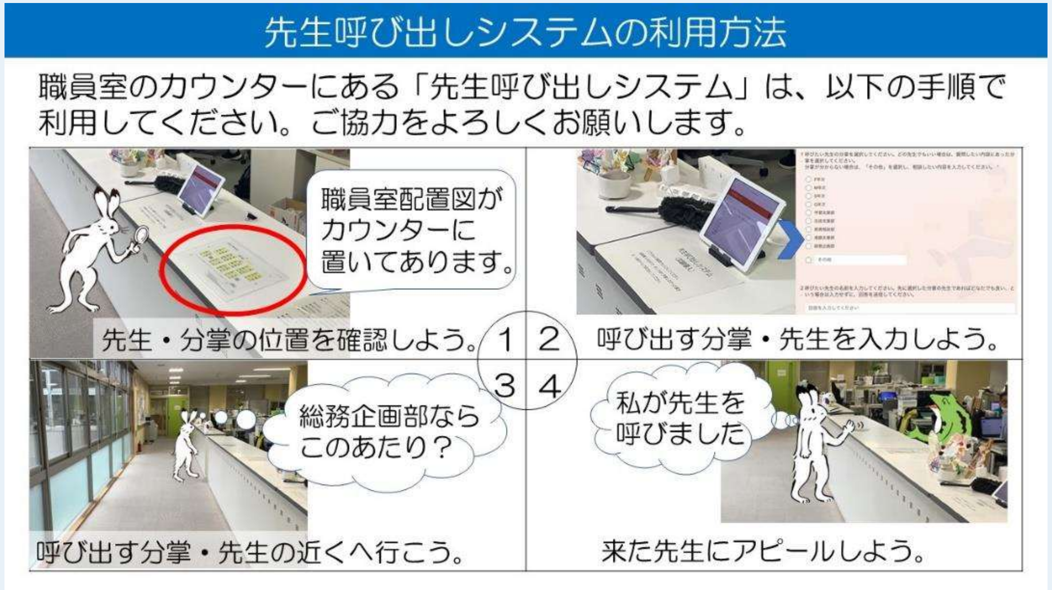
また、つばめ祭やつばめ杯でのパフォーマンス、昼休みや放課後のプチイベント、チャレンジデーやＳ-フェスなど、生徒がそれぞれの推し活やヲタ活を披露する場も充実してきました。プロ級のピアノは聴けるし、意外性の極めて高いカラオケやラップも見られるし、プリキュアへの熱い想いも聞けるし、生徒も教職員も新たな発見があります。

今後も鉄ヲタ・アニメ聖地巡礼等の生徒企画型ツアーや「ヲタ活・推し活」大会、そして何よりも普段の教科・科目での探究活動の充実を図りたいと考えています。

【潜在的ニーズ】 #3 学習者起点

　生徒・保護者を対象にさまざまなアンケートを実施し、教育活動の改善に役立てています。それらについて、即実行できることにはスピーディーに対応しますが、個別に丁寧に聞き取りを行って関係者の同意を得ながら環境を整えることも大切にしています。

　また、生徒自身も気づいていない潜在的ニーズを捉えることを重視しています。職員室で大きな声で先生を呼ぶことができなくても大丈夫な「先生呼び出しシステム」や、外出届のオンライン化など、生徒からのリクエストはなかったものの、生徒から好評を得ています。



【バイアス払拭】 #3 学習者起点

　「清明の生徒は他とはちがうにもかかわらず、他校と同様のことをしてしまっている」という課題意識を持ち、これまでも、欠席に対するその都度の家庭連絡や欠課連絡カード等、本校になじみにくい業務・手順を廃止・変更してきました。また、単位制で原級留置や仮進級がないにも関わらず認定会議当日に保護者に電話連絡を入れるという業務が続けられていましたが、これも改めました。今後も、多様な学習経験や特性のある生徒が通う本校の特色に応じた最適化が図れるよう、ルールや業務・手順を見直していくべきと考えていますので、煩雑で負担が大きい、非合理的であるなど、お気づきのことがありましたら、ぜひ管理職にご相談ください。

　「専門家ほどバイアスの罠にはまりやすい」と言われます。前例踏襲に陥らず、「普通」という思い込みを批判的に見直し、学習者にとって有効かどうかという判断を大切に、学校の魅力化に取り組んでいきましょう。

【特性について】　＃４ 教育のＵＤ化

「特性のある生徒へのかかわり」について（2022.3.7部長会議「校長より」）

- 本校では、特性に対する家庭や学校の理解不足と不適切な対応により、生活上の支障が引き起こされ、二次的な問題を生じた結果として不登校に至った生徒が多数を占めている。
- 支援の目的は、生きづらさの改善と社会参加に向け、それぞれの障害の特性に応じた援助を行うことであり、決して発達障害のある生徒を定型発達に矯正することではない。
- 特性に最適化した教育の前に、まず環境調整を行うことが大切で、特に過剰訓練に陥らないよう注意が必要である。
- 環境調整を行うにあたっては、個々の生徒の存在そのものを認め（「あなたは白鳥であり、そのままでよい」）、苦手の克服に執着しない（「あなたがアヒルになる必要はない」）という教職員のマインドセットが不可欠である。
- その上で、特性に最適化した教育を行うにあたっては、生徒の主体性を尊重し、個人・グループによる探究・プロジェクトや体験を通して気づき学ぶ「引き出す教育」により自信の回復をめざす。

【持続可能な教職員研修】　＃４ 教育のＵＤ化

　本校でも年数回、研修会を行っていますが、多様な教育課題をすべてカバーできるはずもなく、教職員の異動も毎年あり、とてもではありませんが、研修参加のみで私たちに必要な知識・スキルをすべて身につけることはできません。

　学びは「イベント」と「習慣」で成り立っています。例えば誰かのコンサート（イベント）に行って刺激を受ければ、もっと上手になりたいとピアノの練習（習慣）に励むことができます。あたりまえですが、コンサートを見るだけではピアノは上達しません。同様に、研修会（イベント）に参加するだけでは知識・スキルは身につきません。

　全体研修は刺激を受けてモチベーションを高めるためのものであり、個別研修、つまり日常的に本やYoutubeなどから学び続けることこそが、インプットの最適な手段・方法です。そうした「持続可能な教職員研修」の実現のために、「ティーチャーズバイブル」の「実践編・資料編」の整備・更新を引き続き進めたいと考えています。

【ダイバーシティ】 ＃５ 働き方改革

開校５年目までの清明高校では、部長の先生は全員男性でした。それから１名、２名と、少しずつですが女性が増えてきています。性別だけではなく、年齢、国籍、職歴、価値観、障害の有無、ライフスタイルなど、多様性を生かした学校運営ができればと考えています。

また、昨年度より校内のプロジェクトチームである「シン・会議」では、若手の教職員が中心となって、働き方改革についてもチャレンジングな提案をしてくれています。ベテランも中堅も若手も、立場の違いを超えて提案していける、そんな垣根の低さと心理的安全性が実感できる風土ができつつあります。

趣味・嗜好のちがいも多様性の大切な一つです。 Slack の Random では、教職員の多様性も垣間見ることができ、今後もみなさんの投稿を楽しみにしています。

【ワークライフバランス】　＃５ 働き方改革

　職員朝礼の廃止、中学校訪問の廃止、電話応答時間（8:30－17:00）の設定、通知表の所見・押印の廃止、指導要録・調査書の所見のテンプレ化、長期休業期間の会議・研修会の禁止、日々の家庭連絡の廃止、リフレッシュデーの年休奨励など、他校に先駆けてさまざまな働き方改革を進めています。

　また近年は、超勤縮減に加えて、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりにも注力し、衛生委員会を中心に「退勤宣言カード」や「職員スポーツ大会」にも取り組んでいただいてます。

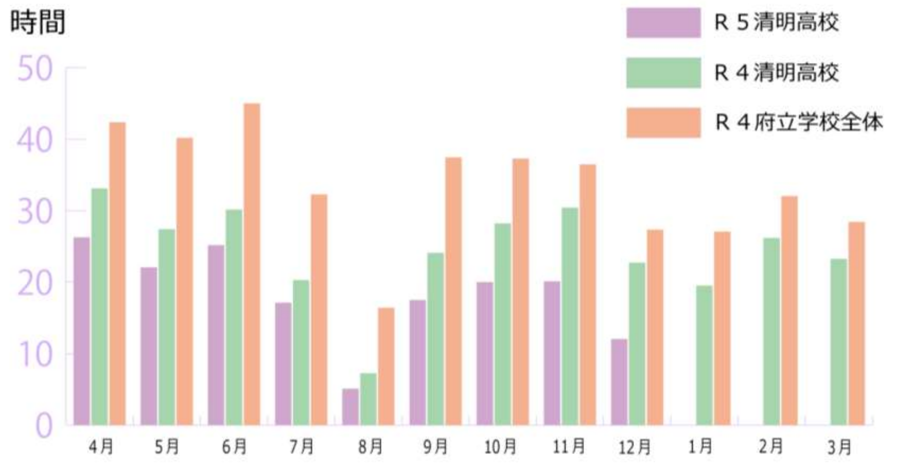
ジョンソン・エンド・ジョンソン時代に、尊敬するイギリス人の先輩から教わったという言葉

「慢性的な残業は無能力の証であり、悪徳である」

がいつも心のなかにあったゆえではないかと思う。

（新将命『経営の教科書』より）

令和５年度 一人当たり時間外勤務時間



以上です。

一年間、よろしくお願いいたします。